

## インターネットを利用した看護援助に関する考察

(インターネット/看護/電子メール)

岸田 泰子\*

## A Review of Nursing Care Using the Internet

(Internet / nursing / electronic mail)

Yasuko KISHIDA\*

As a part of the health support project for adolescents via the Internet, I examined articles on the effectiveness of the Internet as a means of nursing.

Only a few Japanese articles on this subject were found. However, I was able to find many articles from abroad. They described the utilization of the Internet as a tool of communication with patients, education for patients, support for patients of cancer, and counseling through websites.

The advantages of the use of the Internet in nursing are:

- (1) The interactive communication of the Internet enhances empathy and understanding of each other, "inter-subjectivity" of mutual education, and better nursing care.
- (2) Expressing themselves in letters can lead to insight and catharsis.
- (3) These activities lead clients to utilize their potential and promote their ability to recover.

The greatest disadvantage of the use of the Internet is in the difficulty of protecting information leakage. It is important to protect the users' privacy and try to minimize the harmful influences.

インターネットを利用した、看護職者による、思春期対象の健康相談事業を開設するにあたり、インターネット利用に関する文献を概観し、看護援助への有効性を考察した。

インターネットを利用した看護援助に関する文献は、日本では少なかったが、海外では、インターネットは患者とのコミュニケーション、患者教育、癌患者の精神的サポートなどの手段として、また相談サイトとして幅広く活用されていた。

看護においてインターネットを利用する意義として、(1)インターネットのもつ双方向性により、「共感」や「相互理解」を生み、互いに学びあう「相互主観性」も存在し、ケアリングの効果が期待されること、(2)感情を文字で表出することにより、新たな気づきが生じ、自己洞察につながることで、また感情の浄化作用が生じること、(3)対象が自分の内に秘めた資源を活用できるよう援助し、対象者固有の治癒能力を促進することにつながることで考えられた。

インターネット利用の最大のデメリットはプライバシー厳守が困難なことである。利用者のプライバシーをいかにして守り、弊害を最小限に留めるかを考えることが課題である。

### はじめに

インターネットの普及は、多大な情報を提供するだけでなく、コミュニケーション形態を変化させている<sup>1)2)</sup>。また新しいコミュニティをも形成し、現代の生活環境に影響を与えている。例えば、Gumpert<sup>3)</sup>は、電話をはじめとする多くのメディアによって、「地図のな

いコミュニティ」が出現しつつあると指摘した。直接的なコミュニケーション以外でも他者との人間関係が成立し、人間同士の話し合いに「同じ場所にいる」という条件が不要になったとも述べている<sup>3)</sup>。また、日本情報処理開発協会は「意思を表現したデータによりコミュニケーションを行う場」、「距離的、時間的、空間的に、プライバシーのバリアを超えたコミュニケーションを行う場」として、データ・コミュニティという考え方を提唱している<sup>4)</sup>。

\*臨床看護学講座 Department of Clinical Nursing

インターネットの利用に関しては、氾濫した情報に対する信頼性の問題やセキュリティの問題など課題は数多い。しかし、距離や時間、空間を超え、双方向性に情報を送受信できうることによるコミュニケーション形態としての利点は、先に述べたデメリットを凌ぎ、生活の中でインターネットの利用率の高い思春期・青年期<sup>5)</sup>に対する援助方法として用いるのに適していると考えた。特に、昨今の若者の携帯電話を利用した電子メールによるコミュニケーション行動は、新しい文化とも言える勢いで浸透し、多くのデータ・コミュニティが出来上がっているという時代背景から見ても、このメディアの利用は時宜を得ているのではなかろうか。また青少年の犯罪の低年齢化、性の社会的逸脱行為、十代の人工妊娠中絶の増加などが大きな社会問題として取り上げられており、青少年に対する社会全体での支援策を考えることは急務である。

看護の中でも、インターネットの利用は近年急速に進んでおり、専門職間の情報の提供、看護教育や看護管理などで利用がなされているが、インターネットにより看護援助を提供しようとする試みは現在のところ、国内にはほとんど無い。

本研究の目的は、思春期の心身の健康に焦点をあてた、看護職による相談サイトを立ち上げるにあたり、インターネットを利用したコミュニケーション方法を導入し、非対面的な看護援助を行うことに、どのような有効性があるのかを文献的に考察することである。本研究で得られた結果により、看護の中にインターネットを利用して看護援助が展開されることの将来的な予測を行うことは、今後、看護職による相談サイトの企画や運営に寄与するであろう。本研究は、その予備的研究である。

なお、本論文において“看護援助”とは看護職が提供するケアで、またインターネットの可能性を追求することから、次元および距離を超えて存在する看護者とクライアントという人間同士の間のケアリングに基づく相互のかかわりと定義する。

## 日本におけるインターネット利用の現状

わが国における、インターネットの普及を概観する。平成11年度の郵政省の報告によれば、我が国のインターネット人口は推計1,700万人とされている<sup>6)</sup>。また野村総合研究所によれば、1999年10月現在において、パソコンが自宅にあり、自分で使用している人の割合(個人利用率)は23.0%であり、生活者の4人に1人が自宅でパソコンを利用している状況にある<sup>5)</sup>。さらに

最近では、携帯電話やPHSもすさまじい勢いで普及しており、その利用率は59.9%、それらを利用してインターネットへのアクセスや、電子メールの送受信をする者は、そのうちの9.5%で<sup>5)</sup>、現在もなおその利用者は急速に増え続けている。パソコンなしでも、歩きながらインターネットへアクセスでき、電子メールを使用することができる状況をあちらこちらで目の当たりにする昨今である。

インターネット利用のメリットにはいろいろあるが、地理的・時間的制約がないことと、情報を受信するだけでなく、受信者が発信者に対して返信ができる双方向性があるということなどである<sup>2)</sup>。ただ単に情報を受けるだけでなく自分の好きな時間帯に、どんな地域からでも、インターネットを利用して意見発信することが可能である。若者たちは、インターネット上の掲示板に自分の居場所を見つけ<sup>2)</sup>、インターネットを通じて自分とは異なる立場からの発言や考え方、年齢も性別さえも不確かな見知らぬ相手へ発言する方法やルールと出会い、新たな自分を発見し、データ・コミュニティを形成する。その中でそれぞれの表現方法を用いて自己主張することを楽しんでいる。

また、コンピュータによるコミュニケーションの特徴として、ホスト・コンピュータとやりとりできる状態にしなければ、メッセージの送受信はできない。言い換えれば自らアクションを起こさない限りコミュニケーションは成立しないので、このメディアは利用者の積極性が求められる媒体でもある<sup>2)</sup>。

## 研究方法

看護の中でインターネットがどのように利用されているのか、文献検索を行った。国内文献については、医学中央雑誌(WEBサービス検索)を利用した(キーワード:「インターネット」および「看護」, 1993~2000年)。検索は平成12年4月21日に行った。

海外文献については、CINAHL (Cumulative Index to Nursing & Allied Health Literature) を用いて、1982年~2000年7月の期間でinternet, nursingをキーワードとして検索した。検索は平成12年9月7日に行った。

なお、CINAHLはアメリカの英文論文を中心に作られた看護独自の文献データベースであり、MEDLINEと比較すると、データ件数は、収録する主題領域を限定しているために少ないが、看護職、コ・メディカルを対象に、既存のデータベースが収録しない資料を網羅し、収録雑誌は1,218誌、全件445,994件(1999年3月現在)である<sup>7)</sup>。

結 果

1. 国内の文献検索

日本でのインターネットを利用した看護に関する文献は、上記方法により検索を行ったところ、92件が検索された(図1)。年次別に見ると、1995年2件、1996年6件、1997年24件、1998年28件、1999年26件、2000年6件であった。1997年から急増していた。

インターネットに関する文献が始めた1995年～1997年では、インターネット・パソコンに関する初歩的な知識の提供に関する文献や海外事情の紹介がその大部分を占めており、インターネットを利用した報告は1997年の後半から徐々に見られはじめた。これらの文献を内容別に見ると、看護情報や検索システムに関連した文献が最も多く、ついで看護教育に関するものであった。地域支援システムやネットワークに関しては92件中6件あった。

このようなインターネット利用の背景には、利用者が容易に操作できる新しいオペレーションシステムウェアの登場があり、その頃から看護の中でもインターネットの利用が浸透してきたと考えられる。日本において、看護管理あるいは看護教育においてのインターネットの利用は進んできているが、地域支援やネットワーク作りにおける看護分野の研究は

非常に少ない。現状でも、インターネットを利用した医療の基礎的な情報の提供、あるいは関連機関の紹介は、なされているが、これらは看護におけるインターネット利用の可能性の一部にしか過ぎない。地域支援システムやネットワーク作りのためにインターネットが利用され始めたのは、1999年以降であることから、今後ますますこの分野でのインターネットの活用が期待される。

2. 国外の検索結果

海外文献は総計258件が抽出された(図1)。1995年から徐々に増え始めており、1997年は65件でこの8年あまりで最も多かった。これらのうち、WEB上で要約が閲覧できるもの125件に限り、その内容を分類し、検討した。その結果を表1に示した。海外でも日本の場合と同様に、インターネットを利用した看護教育<sup>9)10)</sup>や看護情報<sup>11)</sup>においての活用が多く見られた。

特に看護情報においては、インターネットを利用することで新しい医学情報や看護情報を入手することが、臨床での即戦力になること<sup>10)11)</sup>や、老年看護<sup>12)</sup>や精神科看護など、特定の分野からの報告が見られた<sup>13)14)</sup>。精神科看護の分野では比較的早い時期からインターネットを利用した専門職間の情報交換がなされており、特にメーリングリストを利用して、様々な議論がなされているとの報告があった<sup>14)</sup>。

また、多くの人が健康に関する情報を集める手段としてインターネットを利用していることから、インターネット利用者に対し看護側から調査を行う手段として、メディアを利用することも報告されていた<sup>15)</sup>。

看護援助として、また地域住民や患者の支援システムとしてのインターネットの活用に関する論文は1997年から見られた。インターネットがどのように利用されているのか、その内容を検討した。

(1) 患者とのコミュニケーション手段、あるいは患

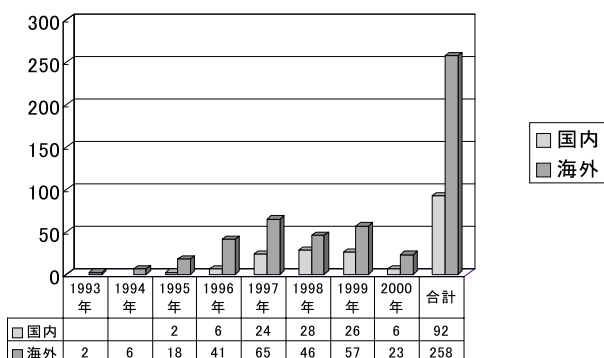


図1 国内及び海外のインターネット及び看護の関連文献数

表1 海外文献の年次別内容(N=125)

	ケア, 支援システム	看護教育	看護情報	看護管理	研究, 調査	その他
1993年			2			
1994年		1	1			
1995年		2	4			
1996年		2	11	2		2
1997年	1	1	10	2	1	
1998年	5	10	12			
1999年	3	12	20	4	2	
2000年	3	5	3	2	2	
合計	12	33	63	10	5	2

### 者教育としての利用

Bennett<sup>16)</sup>は、インターネット人口が増加していく中で、看護の立場から、電子メールを使用して患者とのコミュニケーションを高めることについて述べている。特に、患者教育においては、インターネットの利便性のほかに、やりとりの内容を印字することができ、繰り返し見直すことができること、またそれを自分の記録として残しておくことなど、電話以上の効果が期待されている。患者からの要求も漸増しており、早急に法的な手続きも含めてのガイドラインを作成する必要を指摘している。またFrandsen<sup>17)</sup>は、インターネットを利用して癌性疼痛を管理する方法を検討し、その限界性はあるが、コンピュータ技術を応用することは、疼痛緩和ケアの改良や看護者の教育に役立つ可能性や患者とのコミュニケーションへの援助として有効であることも報告している。日本では、介護保険制度が施行され、患者の在宅看護が進んでいく中で、インターネットを利用した在宅ケアに関する援助方法の多くの示唆は、今後国内でも取り入れられていくものと予測される。

#### (2) 精神的サポートとしての利用

精神的に危機状態にある癌患者に対しインターネットを利用してサポートグループを形成し、同じような境遇にある患者や家族への情報提供や精神的サポートとして効果をあげた報告がある<sup>18)</sup>。また、Lakeman<sup>13)</sup>は、精神看護の分野でインターネットを利用したことのあある看護婦への調査を行っているが、精神面を扱う以上、プライバシー厳守に関して細心の注意が必要で、インターネットを利用することの危険性をどのように克服するかは、今後の大きな課題となっている。Bennett<sup>16)</sup>は、特にプライバシー厳守が必要な精神病患者やHIV患者においては、看護する際のインターネットの利用は好ましくないと報告している。看護援助を提供する上で、扱う患者に関する情報の守秘については、体系的な倫理規定が必要であろう。

#### (3) 相談サイトとしての利用

Huyhnら<sup>19)</sup>は、高校生に対して看護学専攻の大学生が相談に応ずるサイトを立ち上げた経緯について報告している。そこでは、健康一般に関する相談を扱うが、高校生と看護学生が事前にニーズについて話し合いの場を持ち、信頼関係を築き、定期的な相互の意見交換の場が形成されていた。インターネットを利用することは、仮想の世界を築くことへの懸念が多いが、この方法は、あらか

じめ対面し、ラポールを築いているだけに、相談者にとっては発信しやすく、また相談を受ける側にとっても、相手の基礎資料があることは、回答を導きやすく、親近感も生まれやすい。

Schulmeister<sup>20)</sup>は、自宅を拠点とした看護相談ビジネスの可能性について論じているが、その中で、目的を持って実施すること、勤勉であること、ネットワークを固めることが成功の秘訣であるとし、オンラインサービスによりこのビジネスの紹介が行われている。看護サービスを提供する看護者が働く場所を必要としない新しい試みである。コマーシャル効果に優れ、24時間体制で情報が提供でき、コストも安いことがインターネットの利点である。

## 考 察

患者と医療者のコミュニケーション手段としてのインターネットの利用は、看護だけでなく、臨床医学領域でも活用されており、特に予防的なケアや骨関節症の管理、心臓病のリハビリ、糖尿病のケアのために有効であるとの報告がある<sup>20)</sup>。電子メールの使用は、心理面に關わるようなプライベートな情報の取り扱いや患者にとって緊急性のある内容には適さないが、たとえば減量に関すること、血圧や血糖の自己管理についての相談などには手軽に利用でき、個別の教育的効果が高い。Balasら<sup>21)</sup>は、専門職間だけでなく、患者と臨床医との間でインターネットを活用することを勧めている。看護分野でも専門職間での利用以外に多様な活用がなされていた。

しかし日本では、看護の中でインターネットの活用は、教育や情報的手段にほぼ集約された。今後、インターネットを看護に取り入れることにより生じるメリット・デメリットについて十分検討した上での利用が望まれる。具体的には次のようなことが考えられる。

#### (1) インターネットの“双方向性”と看護

インターネットでは、テレビ・ラジオ・新聞のように一方的な情報を提供するのではなく、情報の受信者が発信者へ容易に返信することができる“双方向性”という大きなメリットがある。例えば、電話相談は、相談者が電話を切ってしまうと、その後のつながりはできない。“双方向性”というインターネットの特徴を生かせば、ネット上でのコミュニケーションを重ねることにより、情報発信者と受信者との間に「共感」も生まれ、「相互理解」も可能である。

看護の本質であるケアリングを看護理論として

発展させたワトソンは、人間理解について、「相互主観性」という言葉を用いた。それによれば、ケアリングとはクライアントと看護者との間において人間性を共有しつつ相互理解することにより、両者が互いに学びあうものである<sup>23)</sup>。深い関わりを持つためには、その関係を作り上げるためにお互いが積極的にコミュニケーションを図る努力をする必要がある。また最高の専門的看護ケアは、空間や時間を超越して、看護者とクライアントの間の人間的なやり取りの中に存在する<sup>24)</sup>。文字と記号のみを用いるデジタル型コミュニケーション<sup>2)</sup>は暖かみを欠くという印象を受けやすいが、インターネットをうまく利用すれば、新たな次元空間の中にこの相互主観性が生まれ得る過程を築くことができ、看護の特性を發揮し得ると考えられる。

## (2) 文字で表現することの意義

インターネットでは、キーボードを打ったり、携帯電話の文字盤を押して文字に表わしたりしないと、自分の主張をすることはできない。この作業は、すべての人に容易であるとは言えない。しかし、このような「文字で表す」ことのメリットは大きい。

子どもたちにとって、「描写する」あるいは「記述する」ということが会話での言語以上に思考を表現する方法として意義深いという報告がある<sup>25)</sup>。また初期のトラウマに関しては、それを語ることや記述することによって、打ち明けることが有益だという心身医学の立場からの報告もある<sup>26)</sup>。例えば、自己洞察につながる、書くことによる気づき、自分の内面にある思いを外に出すことで、感情の浄化作用が生じること<sup>27)</sup>などである。看護にとって必要なことは、対象が自分の内に秘めた資源を活用できるよう援助することであり、対象者の固有の治癒能力を促進することである。その点で、ケア提供者とクライアントがお互いの気持ちを表現できる場を提供し、ケア提供者自身が高度の自己理解に努力することに加えて、お互いの気持ちを受け止めることが可能な、このコミュニケーション手段は、看護の役割を果たすものと期待できる。

メールでのやり取りには、面接や電話相談にないタイムラグが生じるが、それは相手の反応を直に観察することができないというデメリットでなく、返信までに時間的余裕を持ち、対応に工夫ができることや、一人では対処しきれない限界を感

じたとき、スーパーバイズを受けた上で対応することができるメリットとも解釈できる。こうしたデジタルコミュニケーションは、相手の反応がリアルタイムに読みとれないからこそ、メールを打つとき一段と細心の注意を払うのである。

心理療法の分野では、大学生の精神保健相談を電子メールで行い、医療機関に向くことが時間的・物理的・精神的に困難な場合や対面型の面接での緊張が強い場合にこの方法が有効な手段であると報告されており、今後、若者への精神的援助として電子メールを利用する「ネットサポート」の発展の可能性が示唆されている<sup>28)</sup>。

## (3) 自助活動の効果

田村<sup>27)</sup>は、メーリングリスト（特定のグループ内のメンバーが送る電子メールが、登録されたメンバー全員に配送されるシステム）を使った、心の癒しを目的とする自助グループを作って活動しているが、メーリングリストで発信された電子メール200通を分析したところ、その57%に共感、サポート、感謝といった情緒的な交流が見られたと報告している。ネット上では、通常では出会いにくい、同種の悩みや問題を抱えた人に会うことができ、匿名であるという自由さから今まで誰にも話せなかったことを話すことができる。それは今までにない情緒的交流を生み出し、高い共感性に結びついている。電子メールは、他者へのメッセージという形を取りながら、実際はディスプレイに向かい、ディスプレイが自己を映す鏡のように働く。このことは、今まで気づけなかった新たな自分を発見することにもつながり、自分の表現した文章を読み返すことによる自己洞察の作用はさらに深まる。さらにこのメーリングリストという方法は、参加者同志の自助活動によるpeer support（仲間同士の支え合い）の効果をも期待できる。

メーリングリストについては、対面的なコミュニケーションが、日常では難しいような遠隔地や時間的都合のつきにくい集団のディスカッションの場として、困難さを補うことができ、専門職者間の相互の交流にも有益であることが看護側からも報告されている<sup>29)</sup>。

## (4) インターネットによる弊害

インターネットの利用に際しては、プライバシーの問題以外に、悪影響についても十分に考えなければならない。例えば、匿名性によることで、無責任な発言が起こる可能性、サポートのはずががえって、その返信により傷つく可能性、ポ

ルノ画像や毒物などの有害情報が流布する可能性、現実世界からの逃避が起こり、仮想世界へのめりこむことにより、現実世界への適応を阻害する可能性<sup>27)</sup>、コンピュータ・プログラムの改ざん、いわゆるコンピュータウイルスと呼ばれる不正プログラムによる被害などである。

現在、世界的には10万ヶ所以上の自殺をテーマにしたウェブサイトが存在すると言われており、それらが自殺を奨励する可能性もあるという見方がある<sup>30)</sup>。Miller<sup>31)</sup>は、自殺をテーマにしたインターネットの掲示板に投稿された発言を分析したところ、参加者は安全な距離を保っており、発言の中に体験、共感、受容、激励に相当する項目が見られ、親密な友情が形成されていたと報告した。ここでは、問題を解決するというより、時を共有し苦難を分かち合おうとする傾向が見られたという。これに対して、Lebow<sup>32)</sup>は、対面したことの無い継続性のない交流を批判し、継続的な人間関係の必要性を提言している。またBaumeら<sup>33)</sup>は、若い世代では、自殺報道の直後の後追い自殺が増加し、インターネットは自殺を取りやめようとする可能性を自殺の宣告へと変えてしまうほどの破壊力を持っていることを指摘している。インターネット主催者はたとえ専門家であっても、自分の領域をよく理解した上で運営することが必要であり<sup>31)32)</sup>、利用者に対しても、しっかりとガイダンスを与えることが重要になる。そしてインターネットの持つネガティブな影響に対応する規制も作るべきである<sup>31)</sup>。

インターネットを利用し援助を提供することには多くのメリットとともに、利用することにおけるデメリットも少なからず存在する。そうした弊害を最小限に留めるための努力と対策が大きな課題である。

インターネットを利用した相談事業の展開を考えると、問題の第一は、どこまでプライバシーが守られるかという問題であろう。それに対し、内容の暗号化という方法の開発が進んでいるが、技術的な煩雑さもあって一般のネット上ではまだ普及していない。利用者にはその危険性を十分に知らせた上で、利用者の匿名性を保持する配慮は欠かせない。Lakemanはこうしたインターネットテクノロジーにおける固有の問題は解決し得ると予測している<sup>13)</sup>。また未知なる大多数の対象者を相手とすることを考えると、受信者側のマンパワーの確保も重要である。

## おわりに

インターネットの利用は誰にでも適応する方法というには、まだ敷居が高い<sup>27)</sup>。インターネット利用者の性格に特性があるという報告もあるように<sup>28)</sup>、すべての人に共通した普遍的な介入方法としてでなく、このような方法の紹介と有効活用の可能性の認識を広めることも必要である。

## 引用文献

- 1) E. M. ロジャーズ著、安田寿明訳：コミュニケーションの科学 マルチメディア社会の基礎理論、共立出版、東京、1992年
- 2) 川上善郎、川浦康至、池田謙一他：電子ネットワークの社会心理、誠信書房、東京、1998年
- 3) Gumpert, G.: Talking tombstones and other tales of the media age. Oxford University Press, London, 1987.
- 4) 日本情報処理開発協会編：情報化白書、コンピュータエージ社、東京、1991年
- 5) NRI野村総合研究所：情報通信利用者動向の調査、東京、2000年
- 6) 郵政省：通信白書平成12年版、東京、2000年
- 7) 和田佳代子、伊関節子、松本直子：CINAHL看護シソーラスの翻訳と分析、看護研究、32(5)、45-55、1999年
- 8) Kirkpatrick, M.K. & Brown, D.: Efficacy of an international exchange via the Internet. Journal of Nursing Education, 38(6), 278-281, 1999.
- 9) Boyden, K.M.: Development of new faculty in higher education. Journal of Professional Nursing, 16(2), 104-111, 2000.
- 10) Bodin, G.P. & Rice, K.L.: Vascular nursing Internet resources ; tool for cyberspace. Journal of Vascular Nursing, 18(1), 22-29, 2000.
- 11) Purssell, E.: The diagnosis, transmission and prevention of HIV-1 in the infant under 18 months of age; implications nursing practice. Journal of Clinical Nursing, 7(4), 297-306, 1998.
- 12) Davidhizar, R., Bechtel, G.A. & Woodring, B.C.: The changing role of grandparenthood. Journal of Gerontological Nursing, 26(1), 24-29, 2000.
- 13) Lakeman, R.: Charting the future today ; Psychiatric and mental health nurses in cyberspace, Australian New Zealand Journal of Mental Health Nursing, 9(1), 42-50, 2000.

- 14) Bowers, L.: Constructing international professional identity; what psychiatric nurses talk about on the Internet. *International of Nursing Studies*, 34(3), 208-212, 1997.
- 15) Thomas, B.: The internet ; An effective tool for nursing research with Women, *Computers in Nursing*, 18(1), 13-18, 2000.
- 16) Bennett, S.D.: Enhancing your patient communications with e-mail, *Clinical Excellence for Nurse Practitioners*, 3(4), 245-246, 1999.
- 17) Frandsen, J.L.: The use of computers in cancer pain management. *Seminars in Oncology Nursing*, 13(1), 49-56, 1997.
- 18) Fernsler, J.I. & Manchester, L.J. : Evaluation of a computer-based cancer support network. *Cancer Practice*, 5(1), 46-51, 1997.
- 19) Huyhn, K., Kosmyna, B., Lea, H. et al.: Creating an adolescent health promotion Internet site ; a community partnership between university nursing students and an inner-city high school. *Nursing & Health Care Perspectives*, 21(3), 122-126, 2000.
- 20) Schulmeister, L.: The challenges of a home-based nursing consultation business. *Clinical Nurse Specialist*, 13(2), 101-103, 1999.
- 21) Balas, E.A., Jaffrey F., Kuperman, J.G. et al.: Electronic communication with patients; evaluation of distance medicine technology, *JAMA*, 278(2), 152-159, 1997.
- 22) DeVille, K. & Greenville, J. F.: Ready or not, here it comes; the legal, ethical, and clinical implications of e-mail communications. *Seminars in Pediatric Surgery*, 19(1), 24-34, 2000.
- 23) キャロル・レツパネン・モンゴメリー : ケアリングの理論と実践, コミュニケーションによる癒し, 医学書院, 東京, 1995年
- 24) Watson, J., 稲岡文昭他訳 : ワトソン看護論 - 人間科学とヒューマンケア, 医学書院, 東京, 1992年
- 25) Backett-Milburn, K. & McKie, L.: A critical appraisal of the draw and write technique. *Health Education Research*, 4(3), 387-398, 1999.
- 26) Pennebaker, J.W. & Susman, J.R.: Disclosure of traumas and psychosomatic processes. *Social Science & Medicine*, 26(3), 327-332, 1988.
- 27) 田村毅 : メーリングリストによる自助グループの試み, <http://www.asahi-net.or.jp/~wn6k-knmt/gakkai.htm>, 1999年
- 28) 下村依子, 近藤志帆, 玉井晴子他 : 大学生の心理相談におけるネットサポートの意義 (第1報), *CAMPUS HEALTH*, 35, 185-189, 1999年
- 29) 佐伯和子, 嘉屋優子, 皆川美紀他 : インターネット上での看護系メーリングリストのコミュニケーション構造, *日本看護科学学会誌*, 16(3), 67~74, 1996年
- 30) Dobson, R. : Internet sites may encourage suicide. *British Journal of Medicine*, 319, 337. 1999.
- 31) Miller, J.K., & Gergen, K.J. : Life on the line ; The therapeutic potentials of computer-mediated conversation, *Journal of Marital and Family Therapy*, 24(2), 189-202, 1998.
- 32) Lebow, J.: Not just talk, maybe some risk ; the therapeutic potentials and pitfalls of computer-mediated conversation. *Journal of Marital and Family Therapy*, 24(2), 203-206, 1998.
- 33) Baume, P., Rolfe, A., & Clinton, M.: Suicide on the Internet ; a focus for nursing intervention? *Australian and New Zealand Journal of Mental Health Nursing*, 7,134-141, 1998.

(受付 2000年9月28日)

